

特集：今日の資料保存 — 図書館、文書館、博物館、そして被災に学ぶ

北茨城市デジタルアーカイブ

— ボランティアとともに資料を残す 図書館の可能性 —

宇梶 裕子

北茨城市立新図書館の概要

北茨城市は、茨城県の北部、隣は福島県いわき市に隣接する位置にある。人口は約4万人、北茨城市立図書館は市の中央にある磯原駅の近く、市内唯一の図書館である。現在の図書館は平成28年6月に新図書館として開館し、収容可能冊数は21万冊の中規模図書館である。図書館の目の前を流れる大北川が窓の外に広がり、その自然豊かな立地を生かして、年4回バードウォッチングを行うなど、特色あるイベントを開催するとともに、基本理念である「みんなが集う・暮らしに生きる市民の図書館」を実現するために、心地よく滞在できる空間づくりに力を入れる運営を行っている。

事業の概要

今回紹介する「北茨城市デジタルアーカイブ事業」は、市内の歴史を残すために、資料をデジタル化し公開するもので、内容は、北茨城市関連の書籍や、図書館所蔵の北茨城市関連の新聞記事の分類目録、野口雨情生家関連の資料、北茨城市所蔵の貴重資料のほか、市民から公募する写真が含まれる。「図書館振興財団の提案型助成金」を活用し、令和5年度に第一次公開、令和6年度に第二次公開を行う予定である。その後も資料の収集を将来にわたって継続して行うために、ボランティアを活用することにより、ノウハウを継承していくことや、小学生のボランティア参加も企画した。これらの内容は“民と官を超えるデジタルアーカイブ事業”として位置づけ、現在と過去の北茨城市について、資料収集公開のプラットフォームを将来に向けて構築し、次世代の市民、研究者、その他多くの人々に市の記録を継続的に残していく

ことを目的とするものである。

「北茨城市デジタルアーカイブ事業」を実施するために

北茨城市は平成23年の東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた。特に沿岸部の被害は大きく、津波により被災した多くの建物が取り壊され、市内の街並み全体が大きく変わっていった。それに加えて少子高齢化により、住む人がいなくなった古い家屋が取り壊されていく様子があちらこちらで見られるようになった。「北茨城市デジタルアーカイブ事業」を行うきっかけは、これら失われていく北茨城市の資料を今残さなければ間に合わなくなるのではないかという危機感からである。

北茨城市はかつて炭産産業に支えられてきたが、昭和40年代の閉山とともに、炭産関係者の人口が流出した歴史がある。図書館には、当時の炭産を調べる人が時折来館し、当時の写真が見たいという質問を受けることがあったが、出版されている市内の炭産資料は少ないと感じる経験があった。市内に残っている古い写真資料を継続して収集・整理・公開していく役割を、図書館が持っているノウハウを生かして担っていけないだろうか。

とはいえ、問題は山積みである。毎年資料費を確保するだけで精一杯な予算の中で、事業を立ち上げるための予算を確保しなければならない。また、最低限のシステム構築費を確保したとして、コツコツと時間をかけて資料を積み上げるには専門の職員が必要となる。会計年度職員が多くを占める現在の職員数で、新たな事業を抱える余裕があるだろうか。毎年行われる人事異動も不安材料の一つである。

問題点を一つ一つ挙げながら、「でも、もし、